

形容詞文における擬態語の意味・用法について

楊 淑 雲

キーワード: 擬態語、形容詞、共起関係、修飾、並列

要 旨

本稿は形容詞と共起する擬態語および共起しにくい擬態語を意味的な面と形態的な面から考察したものである。その結果、以下の点が分かった。①形容詞と共起する擬態語間には形と意味の面である共通性が存在する。②感情・感覚や静的属性を表す擬態語は形容詞と共起しやすいが、動作の様態や変化の結果を表す擬態語は形容詞と共起しにくい。それは、あくまでも擬態語の表す意味によって共起制限が違ってくる。③擬態語が形容詞と共起する際、特定の形容詞と共起するかどうかによって修飾関係または並列関係になる。なお、それによって、これらの擬態語は意味的に自立しているかどうか分かる。

1. はじめに

日本語の擬態語は、動詞を修飾する副詞と見られるのが一般的である。そして擬態語の文法に関する研究もほぼ動詞との修飾関係に着目しているようである。形容詞を修飾する場合については、現象自体は指摘されているが、その修飾関係に関する論究は少ない。楊(2010)では擬態語の程度表現から形容詞との共起関係を考察したが、次のような問題点が残っている。

I 形容詞と共起する擬態語そのものにどんな特性があるのか、またどんな共通性があるのか。

II 擬態語が形容詞と共起した場合、両者の間にどのような関係が見られるのか。

III 形容詞と共起する擬態語は、情態副詞の中でどのように位置づけられるのか。

そこで、本稿では上のような問題を究明するため、「妻は酒でも飲んだのか、まぶたがうっすら赤い。」(飛田p.13)^[1]のような用例を広く収集し、形態的および意味的な面からその共起関係を検討する。また擬態語そのものにはどんな共通性があるのかも見てみる。さらに形容詞と共起しにくい擬態語についても考えることとする。

2. 先行研究

擬態語と形容詞との組み合わせに関する用例を収集するのが困難であるためか、従来この点に関する研究は少ない。また、本稿は楊(2010)の続編であるので、ここでは簡単にまとめてみたい。まず、工藤(1983)では、形容詞と共起する擬態語が次のような二種類に分けられている。

林の蔭で兵士達の顔はのつべりと暗かつた。(野火)

のように具象性が強く、程度性をも内に含んではいるのだが、程度副詞とはいえない。形容詞を修飾する特殊な情態副詞(副詞形・副詞句)を認めなくてはならないと思われる。

また、「どっしりと重い」より「ずっしり重い」のほうが程度性があらわで、さらに「グツと重い・うんと重い」になれば程度副詞と呼びたくなりそうだ。(181ページ)

要するに、形容詞と共起する擬態語は状態の程度を修飾する際、その程度性があらわであるかどうかによって程度副詞と呼びにくい特殊な情態副詞と、程度副詞に近いものの二種類に分けられているということである。

次に、矢澤(2000)は、アスペクチュアルな側面から、動詞にかかる擬態語は「がやがや騒ぐ」のように動作概念を修飾対象とするものであると見なしており、「隣のクラスががやがや騒がしい。」のように状態概念を表す形容詞にかかる擬態語は形容詞の表す程度の質と程度の度合いを表していると説明している。

この場合、状態概念を修飾対象とするため、騒がしさの質を表すと同時に、それらの状態の程度がどんなであることを表す。「ざわざわ」と比べると、状態の質ばかりでなく、騒がしさに程度差が感じられよう。

語彙的な意味としては同じであっても、動作と関わるか状態と関わるかによって、「がやがや騒ぐ」のような過程性や「がやがや騒がしい」のような程度性が現われるのである。(228ページ)

つまり、矢澤(2000)は擬態語と修飾対象との関わりを動作にかかるのか、状態にかかるのか、というアスペクチュアルな観点から考え、擬態語は、動作にかかる場合は過程性が現われ、状態にかかる場合は程度性が現われると見ている。ただ、実際には「ころころと丸っこい女の子だ。」(尾野p.123)のように擬態語「ころころ」が形容詞と共起する際、程度性より情態性のほうが明確に現われる場合も見られる。また、形容詞と共起する擬態語にはどのような特徴があるのか、その共起関係および共起

しにくい擬態語などについては論じられていない。

一方、楊(2010)では、上記の先行研究を踏まえながら擬態語の程度表現から形容詞との共起関係を考察した。その結果、属性形容詞または感情形容詞を修飾することによって、擬態語がそれぞれ「ほぼ程度性のみ修飾するもの」「程度性も情態性も両方とも修飾するもの」「ほぼ情態性のみ修飾するもの」の三つのグループに分類され得ることが分かった。ただ、程度性の表し方に相違が見られるほか、形容詞と共起する擬態語について1節で述べたような問題点が残っている。

3. 考察

3-1. 形容詞と共起する擬態語

3-1-1. 意味的な特徴

小野編(2007)では、意味の面から擬態語を「自然」「人間」「事物」に三大別し、それぞれ用法の違いによって次のように下位分類している。

表1. 小野編(2007)による擬態語の意味分類

自然				人間				事物			
天気	温度	水 液体	火 土	動作 状態 ^{注2}	感情 感覚	性格 性質	体格 姿	動き 変化	形 状態	音・道具 金銭	程度

本稿は上のような分類法に従いながら、実際に収集した用例から形容詞にかかる擬態語を意味別に分けてみる。その結果が次の表2である。(その詳細は付表1参照)

表2. 形容詞と共起する擬態語の意味分類(中の数字は異なり語数である^{注3}。)

自然				人間				事物			
天気	温度	水 液体	火 土	動作の 様態	感情 感覚	性格 性質	体格 姿	動き 変化	形 状態	音・道具 金銭	程度
6	14	2	3	7	60	8	27	5	42	7	69

表2によると、意味別における形容詞にかかる擬態語は、多い順に「程度」が69例、「感情・感覚」が60例、「形・状態」が42例、「体格・姿」が27例、「温度」が14例である。このような傾向は、形容詞の性格に起因すると考える。それについては、以下のように上

位の順から見ていく。

形容詞の意味の諸側面において大きな特徴として挙げられるのはその「程度性」^{注4}である。言い換えれば、形容詞は主体の性質・状態を表すと同時に、形容詞が示す状態の程度、その程度の度合いがどのくらいになるか、なども含んでいることが多い。そして、程度性を持つ擬態語との共起によって、その「程度性」が明確に現われるのだと考えられる。本稿は数や量の多さも、その「程度」に含めることにする。このように、表2から見ると、形容詞と共起する擬態語の中で、程度性を持つものが69語あるということは上のような記述を裏付ける要因の一つと考えられる。以下の例で示しておく。

- (1) ちよつくら重いが、持ってかえてくれないか。(阿刀田 p.286) (属性形容詞にかかって程度性が高く、情態性が低いもの)
- (2) なにやらぎつしり細かい字で書き込んであるメモを開いた。(浅野 p.78) (属性形容詞にかかって程度性も情態性も持つもの)
- (3) そんなこと言われるとちよつびり悲しいわ。(倉橋由美子『聖少女』p.63) (感情形容詞にかかって程度性が高く、情態性が低いもの)
- (4) 何がほしい? はい、お金がどつざりほしいです。(林芙美子『放浪記』p.1022) (感情形容詞にかかって程度性も情態性も持つもの)

ところが、形容詞の表す属性は、ほぼ静的なものであり、積極的に働きかけるものではないと思われるが、実際には動作の様態を表す擬態語との共起によって全体として動きの様態をも表すようになる場合が見られる。7例しかないが、次のようである。

- (5) 「君の奥さんすごい美人じゃないか」と言われて、彼はにんまりと得意そうだ。(浅野 p.221)
- (6) 私は鉄板焼き(焼肉)をご馳走になりました。みんなでわいわい楽しかったですよ。(国研)
- (7) 夜遅く帰ると親がごちゃごちゃとうるさい。(飛田 p.143)

要するに、形容詞はもともと単なる主体の特性・状態を表すと見られるが、そのうち、特性や状態の中に「程度性」も含んでいるものもある。しかし、動作の様態を表す擬態語との共起によって主体の状態を表すと同時に、全体として「動作のあり様」を表すようになって考えられる。(5)は満足してほくそ笑むような「彼」の笑う様子、(6)は大勢の人が声を出して騒ぐ様子、(7)は「親」が不快で煩雑な内容を多量に言い立てる様子、などというようなことを表す。このような擬態語はもともと(8)から(10)の

ように動詞との共起によって動作の様態を表現することに用いられるので、形容詞と共起するようになると、ただ形容詞の表す性質・状態を表現するのではなく、全体としてはむしろ動作を伴いながら動きの様子をも同時に表すと考えられよう。

(8) 大臣は希望のポストに指名され、にんまり(と)ほくそえんだ。(飛田 p.356)

(9) (パーティー)早くいらっしゃいよ。今みんなでわいわいやってるの。(飛田 p.630)

(10) みんな勝手なことをごちゃごちゃ言うばかりだ。(飛田 p.142)

上のような例のほかにも、また次のようなものが見られる。

(11) 夜遅く帰ると女房がぶーぶーうるさいんだ。(飛田 p.482)

(12) わやわやと騒がしい家の中は薄暗い。(小野 p.508)

(13) 先生が来ないらしく隣の教室はがやがやと騒がしい。(浅野 p.65)

(14) 龍子の食事はせかせかとすばやい。(北杜夫『楡家人』p.115)

次に、「感情・感覚」を表す擬態語と形容詞との共起を見る。

周知のように、形容詞は、客観的な性質・状態の表現をなす「属性形容詞」と主観的な感情・感覚の表現をなす「感情形容詞」に分かれる。そして、擬態語には動詞を修飾し、人間の感情・感覚の状態を表すものが多数存在すると認められる。しかしながら、(15)から(17)のように動詞にかかって、または「する」動詞と結合して人間の心的状態を表現するよりも、(15')から(17')のように感情形容詞にかかる表現のほうが話し手にとっての自分なりの内的な感情・感覚を表出することがより強いように思われる。すなわち、形容詞と擬態語との組み合わせによって話し手の感情・感覚をより明確かつ具体的に他者へ説明することができるようになっていいると考えられる。

(15) 母に病名を聞かれるたびに胸がちくちくと痛んだ。(飛田 p.271)

(16) 虫歯かな、奥歯がしくしくするよ。(飛田 p.184)

(17) 虫に刺されたのか皮膚がいらいらする。(島田 p.21)

(15') 胃袋が針で刺されるようにちくちく痛い。(飛田 p.271)

(16') おなかがしくしく痛いです。(飛田 p.184)

(17') のどに魚の小骨がひっかかっているらしく、何か飲み込むたびにいらいらと痛い。(阿刀田 p.7)

一方、小野編(2007)では「温度」や「天気」を表す擬態語があると認めているが、文中での用法によれば、それは「感情・感覚」を表す類に入ると見ていいだろうと考えられる。それらを以下の例のように示しておく。

(18)外に出ると、酔いざめの頬にひやりと冷たい風が快かった。(島田p.167)

(19)その日は、日が落ちて、むしむしと暑かった。(三浦綾子『塩狩峠』p.1207)

(20)高温多湿、じめじめと蒸し暑い、不快な天候が続く。(浅野p.142)

このように、「温度」「天気」を表すことに用いられる擬態語を、「感情・感覚」を表すものに併せて見ると80語になり、意味別に見た形容詞にかかる擬態語の中で一番高い順位になる。それは、感情形容詞(含感覚形容詞)は話し手の主観的な感情・感覚そのものを表すものであり、表現効果を引き起こす機能を持つ擬態語との共起によって話し手が程度性よりも感情・感覚のあり方を多様に表現するようになるからではないかと考えられる。

続いて、形容詞と共起する擬態語の中で三番目に多い「事物の形・状態」を表すものを見る。このような擬態語は属性形容詞と共起し、形容詞の表す主体の性質・状態、いわゆる主体の属性を客観的かつ明確に表出すると考えられる。ただし、「事物の形・状態」を表す擬態語だけでなく、人間の「体格・姿」「性格・性質」を表す擬態語も属性形容詞と共起する。次のような例がある。

(21)特に美人ではないが、すんなりとしなやかな姿が好ましい。(阿刀田p.250)

(22)社長ったら、従業員にはひどく厳しくせに、自分のどら息子にはでれでれに甘いんだからいやになる。(阿刀田p.306)

(23)ぼってりと厚ぼったい唇が動いて、たいぎそうに何や命令する。(阿刀田p.510)

要するに、この三つのグループに属する擬態語は、人間であろうが物体であろうが、あくまでも主体の特性・性質を表す属性形容詞にかかるものと認めてもいいと言える。また、このような修飾関係が多く存在することは、擬態語と動詞「する」との組み合わせに起因すると考えられる。というのは、このような擬態語は動詞「する」と結合し、動詞として使われるとしても、「あまり動詞らしくない、静的な属性を表すだけのものも多いようであり、『ぼっそりしている』『ぼっそりした形』のように、ほとんど『～している』『～した』(連体用法のみ)の形で使われるだけであって、動的な過程を表すことがなく、単なる状態を表し、形容詞と通じる性格をもっている。」^{注5}からである。このようにして(21)から(23)のものを「～する」の形に変えると次のようになる。

(24)水仕事などしたこともなさそうな、すんなりした指である。(浅野p.168)

(25)美人ホステスに囲まれてでれでれしている社長のお供なんて、もうまっぴらだ。(阿刀田p.307)

(26)ゴリラめいて逞しい肉体、ぼってりした唇と太い鼻筋、目と目が離れすぎてど

どこを見ているのか当惑させられた。(国研)

3-1-2. 形容詞との共起関係

一方、収集した用例によると、擬態語が形容詞と組み合わせる際に、あらゆる形容詞と共起することができるとは限らず、ある特定の形容詞と共起しやすいというような傾向が見られる。それらをまとめると付表2になる。ただし、このような組み合わせは、元来「擬態語+する」という形式から動詞「する」が省略された上で形容詞にかかるという「並列」の関係になるのか、または動詞「する」とは関係なく、単なる擬態語と形容詞との共起という「修飾」の関係になるのか、という問題が出てくる。これについてまず付表2にある特定の形容詞と共起する擬態語から見ていく。

(27)頭の奥がじんじん痛い。(飛田p.215)

(28)何が入っているのか、小さいくせにどしとどしと重いかばんだった。(浅野p.205)

(29)新雪のスロープはふわふわと柔らかい。(阿刀田p.463)

(30)温泉に入るといつまでも体がぼつぼつと暖かい。(島田p.189)

上の例のように、形容詞が擬態語と共起することによって、それぞれの形容詞が表す性質・状態がより明確に表現されるようになる。もともと、このような擬態語は(27')から(30')のように動詞「する」と複合し、主体の状態を表現することがしばしば見られる。

(27')頭の奥がじんじんする。

(28')どしとどしとしたかばんだった。

(29')新雪のスロープはふわふわとしている。

(30')体がぼつぼつとする。

そのため、このような擬態語は(27'')から(30'')のように、「する」と複合したまま、形容詞と共起することもあり得るけれども、ほとんどの場合「する」が省略される。それは、「擬態語+する」という形式で現れるものが形容詞の表すものと二重になるため、「擬態語+する」の形式と形容詞とが組み合わせる際に「する」が省略され、擬態語だけが残って形容詞の表す状態を修飾し、いわゆる形容詞が表す状態の質を表すと同時に、それらの状態の程度をも表すことができるようになるからである。

(27'')頭の奥がじんじんして痛い。

(28'')どしとどしとした重いかばんだった。

(29'')新雪のスロープはふわふわとして柔らかい。

(30) 体がぼっぼとして暖かい。

ただ、付表2の擬態語の中に動詞「する」と複合できないものがある。「わいわい」「むしむし」「ぶーぶー」「ぎっしり」がそれである。このように、特定の形容詞と共起する擬態語の特徴を考えると重要なことは動詞「する」と複合するかどうかということより、むしろ擬態語が表す内容によって後ろにかかる形容詞がほぼ決まっていることにあると言えよう。要するに、これらの擬態語は形容詞と共起する場合に特定の形容詞としか共起しないことから分かるように、意味的に自立していないと考えられる。(30)の場合を例として言うなら、「熱を持って、断続する感じでほてる様子」という擬態語「ぼっぼ」のもたらす情報によって修飾されているのは「暖かさ」「熱さ」という状態であるので、形容詞と共起するなら、そのような状態概念を表す形容詞「暖かい」「熱い」が擬態語「ぼっぼ」と共起しやすいようになると考えていいだろう。

一方、付表2以外の擬態語が複数の形容詞と共起した場合、機能的には修飾関係でない場合が見られる^{注6}が、ここではまず修飾関係になる場合から見る。例としては次のようなものがある。

(31) とにかくそこへ行くと電化製品がうんと安くて、信じられないくらいだ。(阿刀田 p.17)

(32) 辺りはもうすっかり暗かった。(国研)

(33) 石の表はすべすべしてほんのりと暖かい。(福永武彦『草の花』p.108)

(34) 先週はめちゃくちゃ忙しかった。(飛田 p.602)

このような擬態語は、事物の程度を表すことに用いられるので、状態概念を表す形容詞との共起によって形容詞の表す状態の程度を修飾する。換言すれば、これらの擬態語は形容詞と共起する場合にいくつかの形容詞と共起し、その状態の程度を修飾することができることから分かるように、意味的に自立していると考えられる。このような擬態語はもともと(35)から(38)のように動詞と共起する際にも特定の動詞に限定されず、複数の動詞と共起し、動作の内容の程度を表すのに用いられる。

(35) きみの会社じゃボーナスもうんと出るんだろう。(阿刀田 p.17)

(36) 旅行の用意はすっかりできた。(浅野 p.159)

(37) 婦人が去ったあと、部屋には香水の香りがほんのり漂っていた。(阿刀田 p.523)

(38) たったの一日で胃が小さくなり、食事の量がめちゃくちゃ減ります。(国研)

また、このような擬態語はもともと動詞「する」と複合しないので、「擬態語＋形容詞」の組み合わせは見られるが、(35)から(38)のように擬態語が「する」と組み合わ

さった上で形容詞と共起する場合は見られない。

(35') *電化製品がうんとして安い。

(36') *辺りはもうすっかりして暗かった。

(37') *石の表はすべすべしてほんのりとして暖かい。

(38') *先週はめちゃくちゃして忙しかった。

上のような擬態語のほかに、事物の程度を表す擬態語を表3のように示しておく。

表3 複数の形容詞と共起する擬態語

類別	程度の度合い	擬態語の例
事物の 程度	甚だしい	うん、ぐつ、ぐん、すっかり、ずん、どっさり、むちゃくちゃ、めちゃくちゃ、 めちゃめちゃ
	小さい	うつつら、ちつ、ちよい、ちょこつ、ちょつくら、ちょつぱり、ぼつ、ほんのり

次に、一見擬態語が形容詞を修飾しているように見えるが、実際には形容詞を修飾しているとは見なし難く、むしろ形容詞と「並列」の関係になるものを検討する。次の例がそれである。

(39) 買ったアイスチョコレートドリンクも以外とあっさりと美味しかったです。

(国研)

(40) 縮緬は肌にしっとりとやさしい。(飛田p.190)

(41) たいそう男らしく、さっぱりと美しい風采である。(田辺聖子『新源氏』p.375)

(39') 買ったアイスチョコレートドリンクは以外とあっさり(と)している。

(40') 縮緬は肌にしっとりとしている。

(41') たいそう男らしく、さっぱりとしている風采である。

というのは、これらの擬態語は形容詞と共起しても形容詞の表す状態を修飾するのではなく、主体の状態を修飾することに用いられるのである。そのため、不特定の形容詞と共起することができるだけでなく、形容詞とともに主体の状態を表すので、形容詞と「並列」関係にあると言えよう。もともとこのような擬態語は(39')から(41')のように「擬態語+する」という形式で主体の状態を表しているが、形容詞と共起すると、(39')から(41')のように「する」と複合したまま、形容詞と共起することもあり得る。

(39'') アイスチョコレートドリンクは以外とあっさり(と)して美味しかったです。

(40")縮緬は肌にしっとりしてやさしい。

(41")たいそう男らしく、さっぱりとして美しい風采である。

以上述べてきたような擬態語と形容詞との共起関係を次の表4にまとめておく。

表4. 擬態語と形容詞との共起関係

	特定の形容詞と共起	不特定の形容詞と共起
並列		あっざりとおいしい。
修飾	頭の奥がじんじん痛い。	すっきりいい。

3-1-3. 形態的な特徴

この節では語形において何らかの共通性があると考えられる形容詞と共起する擬態語について、従来の研究を踏まえながら検証してみる。まず、西尾(1988)では擬態語同士の間での共通点について以下のように述べている。

象徴語のもとなる語根を考えて、そのくり返しや、撥音、促音、長音、「り」などの挿入や添加によって、さまざまな語形が作り出されてゆき、そこに規則性・体系性が見つけやすい。従って、たとえば笑い方を表す擬態語の一部分には、

にこにこ にこり にっこり にこっ にこーっ

にたにた にたり にったり にたっ にたーっ

にやにや にやり にやっ にやーっ

のような関係を表す図が容易に作り出される。象徴語同士のつながりを全体的に調べるためには、このような五あるいは四の語形のような系列を残らず取り上げなければならない。(250-251ページ)

このように、形態上の違いによってもたらされる意味上のニュアンスには微妙な違いが出てくる。収集した用例を見ると、擬態語が形容詞と共起する際に形と意味の面で以下のような共通性が感じられる。

- ① 語末の促音によって主体のあり様を瞬間の印象としてとらえて表現する。例:
「きりきり／きりきりっ」(痛い)「ぐにやぐにや／ぐにやぐにやっ」(ふかふか／ふかふかつ)「ふわふわ／ふわっ」(柔らかい)「ひよろひよろ／ひよろっ」(高い)
「ころころ／ころっ」(丸い)「ひやひや／ひやっ」(気持ちよい・冷たい)
- ② 語根のくり返しによって主体の状態に対して一回性から断続的に感じる様子を表現する。例:「じん／じんじん」(ちく／ちくちく)「ちくり／ちくりちくり」(痛

- い)「ふわっ／ふわふわ／ふわりふわり」(柔らかい)
- ③ 促音の挿入または「り」の添加によって瞬間的にとらえたことをひとまとまりのものとして表現する。例:「ずしっ／ずしり／ずっしり」「どしっ／どっしり」(重い)「ひやっ／ひやり」(気持ちよい・冷たい)「ぼってり／ぼてぼて」(厚い・太い)
- ④ 撥音の挿入または添加によってまとまりのものを味わう余裕の暗示があるということを表現する。例:「ふわり／ふんわり」(暖かい・軽い)「ひやり／ひんやり」(気持ちよい・冷たい)「どしっ／どしん」(重い)
- ⑤ 長音の添加によって主体の状態がある程度続くということを表現する。例:「しん／しーん」(静か)「じん／じーん」(痛い)「ふわっ／ふわーっ」(柔らかい)
- ⑥ 清音・(半)濁音の対立によって主体の状態を表す際、程度の度合いに違いが出ており、またはそれに対する不快な暗示を伴う表現である。例:「くりくり／ぐりぐり」(丸い)「ひりひり／びりびり」(痛い)「ほかほか／ほかほか」「ほっかり／ぼっかり」(暖かい)「ひりり／びりり」「びりびり／びりびり」(辛い)「ふかふか／ぶかぶか」(柔らかい)

上のようなペアから見ると多い順に「痛い」6ペア、「柔らかい」6ペア、「暖かい」3ペア、「気持ちよい」3ペア、「重い」3ペアがある。このように、擬態語が特定の形容詞と共に共起する際に形態面からだけでなく、意味の面にも共通性が感じられると言えよう。

3-2. 形容詞と共に起しにくい擬態語

前節では形容詞と共に起する擬態語を調べたが、ここでは形容詞と共に起しにくい擬態語がどんなものであるかを意味的な観点から考察する。

擬態語の中に動作の様態や出来事の起こり方、あり方を表すものが多く存在する。しかし、3-1-1節の表2によれば、人間の動作の様態を表す擬態語の中に形容詞と共に起するものは7語しかない。ⁱ⁷それは、形容詞の表す属性は、ほぼ静的なものであり、積極的に働きかけるものではなく、単なる主体の状態を表すという性格に起因するからである。また、動作の様態を表すことと何らかの関わりがありながら、「動きそのものの実現のされ方ではなく、実現された回数的なあり方」ⁱ⁸を表す擬態語がある。そのような擬態語は状態概念を表す形容詞と共に起するより、動作概念を修飾対象とする動詞と共に起するほうが自然である。次の例はそれである。

(42) この辺りではタヌキがちよいちよい現れるんですよ。(阿刀田 p.280)

(43) あの人なら上京の折にちよくちよく訪ねてくるよ。(阿刀田 p.281)

(42') *ちよいちよい + 形容詞

(43') *ちよくちよく + 形容詞

次に、表2の「動き・変化」の項目にある擬態語は(44)から(48)のようであり、5語しか形容詞と共起しない。

(44)やはり手紙より電話で話したほうが、フーカーと話が早い。(浅野 p.194)

(45)だらだら長いだけで、さっぱり要領を得ない講演だった。(浅野 p.178)

(46)それこそ結婚する意味ないですが…。ねちねち長くてすみません。新婚早々夫婦別室ってどう思われますか。先輩奥様にお聞きしたかったのでこちらのカテにしました。(国研)

(47)くるくる変わりやすい天気。(浅野 p.105)

(48)やまの美しさにひかれて人は山々に登る。が、山の天気はばーつと変わりやすいから、山登りを甘くみてはいけないよ。(尾野 p.248)

ただ、このような擬態語は形容詞の表す状態を修飾するのではなく、事物の動きを修飾すると考えられる。(44)の場合を例にして言うと、形容詞「早い」の状態を修飾すると言うより、むしろ「話の内容が早く相手に通じて理解し合える」ことを修飾すると言えよう。このように、事物の動きを表す擬態語も人間の動作の様態を表す擬態語も両方とも主に動作概念を修飾対象としているので状態概念を表す形容詞と共起しにくいと考えられる。

また、この項目(「動き・変化」)の中に入っている事物の変化を表す擬態語も形容詞と共起しない。このような擬態語はふつう後ろに結果の修飾を表す「に」語尾を伴って変化の結果を表している。そのため、(49)(50)のように変化の結果をもたらし動きを修飾対象とすることができるけれども、(49')(50')のようにただ状態概念のみを表す形容詞を修飾対象とすると不自然になる。

(49)消防車の放水で夜具も畳もカーペットもびしょびしょにぬれて使い物にならない。(阿刀田 p.408)

(50)炎天下10時間のドライブ。ドライバーも座席の子どもたちもくたくたに疲れてしまった。(阿刀田 p.118)

(49') *びしょびしょ + 形容詞

(50') *くたくた + 形容詞

さらに、変化の様態を表す擬態語は(51)(52)のように形容詞と共起しにくい。それは、そのような擬態語は変化の度合いが大きく、引き続く様子を表しているので単な

る状態を修飾する形容詞と共起すると文が不自然になるからである。

(51) 塾に入ってから娘の成績はぐんぐんよくなった。(飛田 p.127)

(52) 新薬を使い始めると病気がめきめきよくなった。(飛田 p.600)

(51') *娘の成績はぐんぐんよい。

(52') *病気がめきめきよい。

ただ、物事の程度が一時的かつ甚だしく変化してしまった様子を表す擬態語は形容詞を修飾することが可能になる。例えば、次のような例である。

(53) なにしろ軍艦を作るスピードは日本のほうがぐんと早かったからね。そこで軍縮案なんか出しやがったんだ。(北杜夫『楡家』p.1351)

(54) それは翌朝の霜の烈しさを思わせるような晩で、日中とは違って、めっきり寒かった。(島崎藤村『破戒』p.6)

4. まとめ

擬態語は動詞を修飾するものと見られるのが一般的であるが、実際には調査対象とした851語の擬態語の中に177語のものが形容詞と共起することが見られた。それらについて本稿では意味的な面と形態的な面から分析を行ない、また形容詞と共起しにくい擬態語についても考察した。その結果、以下の点が明らかになった。

- (1) 擬態語そのものの表す意味によって形容詞との共起における制限が違ってくる。感情・感覚や静的属性を表す擬態語は形容詞と共起しやすいが、動作の様態や変化の結果を表す擬態語は形容詞と共起しにくい。
- (2) 動詞と共起する場合と同様に、形容詞と共起する際に形と意味の面である共通性が存在する。
- (3) 擬態語が形容詞と共起する際、二つの傾向がある。一つは特定の形容詞と共起する場合、形容詞と修飾関係になることである。もう一つは不特定の形容詞と共起する場合、形容詞と修飾関係になり、または並列関係になることである。なお、特定の形容詞と共起するかどうかによって、これらの擬態語は意味的に自立しているかどうか分かる。

ただし、前掲の問題3について、擬態語は形容詞と共起することができるだけでなく、「もうすっきり初夏だ。」(尾野 p.163)のように「名詞だ」を修飾したり、「納豆やオクラのねばねばは体にとってもよい。」(飛田 p.364)のように名詞として使われたりすることがある。従って、従来、動詞を修飾する情態副詞として見られてきた擬態語を

副詞の中にどのように位置づけるか、ということをあらためて考え直すべきであると思うが、本稿ではすべて今後の課題としたい。

注

¹ 本稿では、7種の辞書(後掲)の中で複数の辞書に収められた現代日本語の擬態語851語を対象とし、日本語コーパスと辞書から形容詞と共起する際の擬態語177語の程度表現を考察するものである。意味記述もそれらの辞書に従った。()の中は用例出典を示す際の略号で、正確な名称は本稿の末尾に記す。用例の「下線」は筆者が入れたものであり、出典名のないものは引用した例文と比較するための作例である。

² 小野編(2007)は、人間の動作に関わる様々な様態を記述する擬態語を「動作・状態」の項に分類している。しかし、ここでは「事物」の「形・状態」を表す擬態語と区別するため、表2に示すようにそのようなものを「動作の様態」とする。

³ ただし、複数の場合に使われて重複して出てくるものについては別々に数えた。それらについては付表1において□でかこって示しておく。

⁴ 西尾(1979)は形容詞の「程度性」について「ものごとの属性には、属性の種類の違いとともに、属性の程度の違いが基本的な契機として存在する。ものごとの属性を表す主要な品詞である形容詞においては、その意味の特性として『程度性』を含んでいることが非常に多い。」と述べている。(155ページ)

⁵ 西尾(1981) 213ページ参照。

⁶ 本稿は楊(2010)の続編でありながら、前篇では主に擬態語の程度表現から形容詞との関わりを考察したが、共起の内実については言及しなかった。

⁷ 調査対象とした851語の擬態語の中に674語のものが形容詞と共起する用例が見られなかった。本来はこのような現象に対して考察を行なうべきだったが、本稿は紙幅の関係でより詳しい考察が今後に残されたままであり、3. 1. 1節の表2に示すように、形容詞と共起する擬態語の中における数少ないものをめぐって考えることにとどめる。

⁸ 田守(2002) 58ページ参照。

用例の出典

(浅野)浅野鶴子編(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店

(阿刀田)阿刀田稔子・星野和子著(1993)『正しい意味と用法がすぐわかる擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社

(尾野)尾野秀一編著(1984)『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂

(小野)小野正弘編(2007)『擬音語・擬態語4500日本語オノマトベ辞典』小学館

(島田)島田基編(1990)『日本語学習者のための副詞用例辞典』凡人社

(飛田)飛田良文・浅田秀子著(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂

(藤田)藤田孝・秋保慎一編(1990)『和英擬音語・擬態語翻訳辞典』金星堂

(国研)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ(2008)国立国語研究所
『CD-ROM版新潮文庫の100冊』(1995)新潮社版

参考文献

加藤重弘(2003)『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房。

田守育啓(2002)『オノマトベ擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店。

西尾寅弥 (1979)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.

西尾寅弥 (1981)「<擬音語・擬態語+する>の形式について」『現代語彙の研究』(1988)に所収明治書院 pp. 211-228.

西尾寅弥 (1988)「象徴語をめぐる<つながり>について」『現代語彙の研究』(1988)に所収明治書院 pp. 246-263.

楊 淑雲 (2008)「擬態語の語尾とその後接成分について」『国語学研究』47, pp. 40-53.

楊 淑雲 (2010)「擬態語の程度表現について－形容詞と共起する場合－」『国語学研究』49, pp. 16-30.

－中華大学副教授－

付表 1: 形容詞と共起する擬態語 (意味別)

類別	擬態語	語数
自然	天気 うらうら、 <u>じっとり</u> 、 <u>じめじめ</u> 、 <u>じりじり</u> 、 <u>ひんやり</u> 、 <u>むしむし</u>	6
	温度 <u>じっとり</u> 、 <u>じめじめ</u> 、 <u>じりじり</u> 、しんしん、どろどろ、 <u>どんより</u> 、 <u>ぬくぬく</u> 、 <u>ひやり</u> 、 <u>ひんやり</u> 、 <u>ほかほか</u> 、 <u>ぽかぽか</u> 、 <u>むしむし</u> 、 <u>むつ</u> 、むわっ	14
	水・液体 <u>じっとり</u> 、 <u>じめじめ</u>	2
	火・土 <u>こんもり</u> 、ちろちろ、 <u>ぽかぽか</u>	3
人間	動作の模態 <u>がやがや</u> 、 <u>ごちゃごちゃ</u> 、 <u>せかせか</u> 、にんまり、ぶーぶー、わいわい、わやわや	7
	感情・感覚 あっさり、いらいら、 <u>がんがん</u> 、きーん、ぎよつ、 <u>きらきら</u> 、きりきり、きりきりつ、さばさば、じーん、しくしく、しっとり、じとじと、 <u>じめじめ</u> 、しゃきしゃき、しゃりつ、しょんぼり、 <u>じりじり</u> 、 <u>じん</u> 、 <u>じんじん</u> 、すかつ、すきつ、 <u>すべすべ</u> 、だらり、 <u>ちく</u> 、ちくちく、 <u>ちくり</u> 、ちくりちくり、ちりちり、 <u>どしん</u> 、 <u>どすん</u> 、 <u>どつ</u> 、とろつ、とろとろ、 <u>どんより</u> 、 <u>ぬくぬく</u> 、ぬめぬめ、ぬらぬら、ぬるり、 <u>ひっそり</u> 、ひやつ、ひやひや、 <u>ひやり</u> 、ひりひり、ひりひり、ひりひり、ひりり、ひりり、 <u>ひんやり</u> 、ふにやり、ふわり、 <u>ぶん</u> 、 <u>ほかほか</u> 、 <u>ぽかぽか</u> 、 <u>ぽっかり</u> 、ぽつぽ、ほろつ、まごまご、むうつ、むずむず	60
	性格・性質 おっとり、 <u>かちかち</u> 、さっぱり、でれでれ、 <u>のっぺり</u> 、のんべんたたり、ぴちぴち、びんびん	8
	体格・姿 <u>がっしり</u> 、きりつ、 <u>くりくり</u> 、 <u>ぐりぐり</u> 、こりこり、ころころ、 <u>こんもり</u> 、しなしな、すかつ、すつきり、すらり、ずんぐり、 <u>すんなり</u> 、 <u>ちまちま</u> 、 <u>でぶでぶ</u> 、てらてら、とろん、なよなよ、ぬっぺり、 <u>ばつちり</u> 、 <u>ひよろつ</u> 、 <u>ひよろひよろ</u> 、 <u>ふさふさ</u> 、 <u>ぶつくり</u> 、 <u>ほっそり</u> 、 <u>ぽつちや</u> 、 <u>り</u> 、 <u>ぽってり</u>	27
事物	動き・変化 くるくる、だらだら、つーかー、ねちねち、ばーつ	5
	形・状態 かさかさ、 <u>かちかち</u> 、 <u>がらん</u> 、 <u>きちん</u> 、 <u>ぎっしり</u> 、 <u>くつきり</u> 、ぐったり、 <u>ぐにやぐにや</u> 、 <u>ぐにやぐにやつ</u> 、こりこり、ころつ、 <u>こんもり</u> 、しん、 <u>しーん</u> 、 <u>きらきら</u> 、 <u>すべすべ</u> 、するする、 <u>すんなり</u> 、 <u>だらだら</u> 、ちらちら、 <u>でーん</u> 、 <u>どしつ</u> 、 <u>どしん</u> 、 <u>のっぺり</u> 、 <u>ばりつ</u> 、ふかふか、ふかふかつ、 <u>ぶかぶか</u> 、ぶくぶく、 <u>ふつくら</u> 、ふにやふにや、ふにやり、ぶよぶよ、ふわーつ、ふわつ、ふわふわ、ふわりふわり、ふんわり、 <u>ぽってり</u> 、ぽてぽて、むつちり、 <u>やんわり</u>	42
	音・道具・金銭 <u>ずしつ</u> 、 <u>ずしり</u> 、 <u>ずっしり</u> 、 <u>どすん</u> 、 <u>どしん</u> 、 <u>どしつ</u> 、 <u>どっしり</u>	7
程度	うっすら、うん、 <u>かちかち</u> 、 <u>がっしり</u> 、 <u>がやがや</u> 、 <u>がらん</u> 、 <u>がんがん</u> 、 <u>きちん</u> 、 <u>ぎっしり</u> 、 <u>くつきり</u> 、ぐつ、 <u>ぐにやぐにや</u> 、 <u>ぐにやぐにやつ</u> 、 <u>くりくり</u> 、 <u>ぐりぐり</u> 、ぐん、 <u>ごちゃごちや</u> 、 <u>しーん</u> 、 <u>じん</u> 、 <u>じんじん</u> 、すつかり、 <u>ずしつ</u> 、 <u>ずしり</u> 、 <u>ずっしり</u> 、ずん、 <u>せかせか</u> 、 <u>ちく</u> 、 <u>ちくり</u> 、ちつ、 <u>ちまちま</u> 、ちよい、ちよこつ、ちよつくら、ちよつびり、ちらり、ちんまり、 <u>でぶでぶ</u> 、 <u>でーん</u> 、 <u>どしつ</u> 、 <u>どしん</u> 、 <u>どすん</u> 、 <u>どつ</u> 、どっさり、 <u>どっしり</u> 、 <u>ばつちり</u> 、	69

	ぱりっ、ひっそり、ひよろっ、ひよろひよろ、ぶかぶか、ふさふさ、ぶっくり、ふっくら、 ぶん、ぼっ、ぼそぼそ、ぼっ、ぼっかり、ほっそり、ぼっちやり、ぼっ तरी、ほんのり、 ぼんやり、むちゃくちゃ、むっ、めちゃくちゃ、めちゃめちゃ、めっきり、やんわり	
計		250

(中の数は異なり語数である。)

付表 2：特定の形容詞と共起する擬態語

類別	擬態語の語例	形容詞の例	擬態語の語数
感情	<u>わいわい</u>	機嫌いい・楽しい	1
	にんまり	得意・うれしい	1
	じりじり	不安	1
	しょんぼり、ひっそり、 <u>じめじめ</u>	寂しい・暗い	3
感覚	ずしつ、ずしり、ずっしり、だらり、どしつ、どしん、どすん、どっしり	重い・にぶい	8
	<u>ふわり</u> 、 <u>ふんわり</u>	軽い	2
	ぬくぬく、 <u>ふわり</u> 、 <u>ふんわり</u> 、ほかほか、ぽかぽか、ほっかり、ぽっかり、 <u>ぽっぽ</u>	暖かい・温かい	8
	<u>ぽっぽ</u> 、むしむし、むっ、むわっ	暑い・熱い	4
	しんしん、ひやっ、ひやり、ひんやり、ひやひや	寒い・冷たい	5
	いらいら、がんがん、きーん、きりきりっ、きりきり、じーん、しくしく、じん、じんじん、ちく、ちくちく、ちくり、ちくりちくり、ちりちり、どんより、ひりひり、 <u>びりびり</u>	痛い・重苦しい	17
	むずむず	かゆい	1
	<u>じめじめ</u>	かびくさい	1
	きらきら、ちらちら	まぶしい・明るい	2
	<u>びりびり</u> 、びりびり、ひりり、びりり	辛い	4
人間様	びちびち、びんびん	元気	2
	さばさば、すかつ、すきつ	爽快・さわやか	3
	かちかち、こりこり	かたい・固太り	2
	ひよろっ、 <u>ひよろひよろ</u>	高い	2
	<u>すんなり</u>	しなやか	2
形状	かちかち、こりこり	固い	2
	ぱりっ	新しい	1
	ぐにやぐにや、ぐにやぐにやっ、ふかふか、ふかふかつ、ぶかぶか、ぶくぶく、ふに	柔らかい	13
	やふにや、ふにやり、ぶよぶよ、ふわっ、ふわっ、ふわふわ、ふわりふわり		
	すべすべ、ぬめぬめ、ぬるぬる、ぬるり	なめらか	4
	くりくり、ぐりぐり、ころころ、ころっ	丸い	4
	だらだら、 <u>ひよろひよろ</u>	長い	2
	ぎっしり、しなしな、すらり、 <u>すんなり</u> 、ほっそり	細長い・細い・細かい	5
	ずんぐり、でぶでぶ	短い・低い	2

	ぼってり、ぼてぼて	厚い・厚ぼったい	2
	ぼっちゃり	豊か	1
	しーん、しん	静か	2
	くるくる	変わりやすい	1
	がやがや、ごちゃごちゃ、ぶーぶー、 わいわい 、わやわや	騒がしい・やかましい	5
	せかせか	忙しい	1
計			115

(中の数は異なり語数である。)